
私の恋と私のサヨナラ・・・

尖角?...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の恋と私のサヨナラ・・・

【Nコード】

N2362T

【作者名】

尖角？・・・

【あらすじ】

高校に入学した私、へんじゅあやの工藤綾乃。

私はそこでテニス部のマネージャーをすることになりました。

そして、私は部長に恋をします。

そんな私の気持ち…そんな私の想い…

そして部長の――。

（前書き）

暇なときに描いた作品なので、出来上がり・内容等は微妙だと思います。

それでも楽しんでくださるとうれしいです。

春の晴れた空の下、私は恋をした。

相手はテニス部の部長。

彼は別にイケメンという類たぐいの人間ではない。

けれど、かつこいいと私は思う。

テニス部の部長であるのにもかかわらず、暇さえあれば玉拾い。

周りに気を使い、場を和ませ、部の“誇り”的な存在である。

私はそんな浩紀こうき先輩が好きだ。

うちの学校では、部長は2年生がやるのが決まりである。

3年生は春の大会と同時にやめてしまい、受験勉強をしなければいけない。それがうちの学校の鉄則である。

そして、もう一つの鉄則、入学時には何らかの部活に入部すべし！
！つというものがあり、私はそれでテニス部のマネージャーをすることになった。

そこで、私は部長に出会う。

まだ、4月28日。私は入学からたったの28日で恋をした。

人は「早い！」とか「ほんとに好きなの？」とかを言うかもしれない。

けれど、好きになってしまったものは仕方がない。

好きなものは好きだし、嫌いなものは嫌いである。これは自然の摂理であり、私にとっての常識である。

4月29日 土曜日

「先輩！」

「今日のメニューはなんですか？」　　と私は練習メニューを聞く。

これがマネージャーとして、1日で1番最初にする仕事。

メニューは先輩が、、部長が決めてくれるので、それに合わせてそのようなことをすべきか、しなくてはいけないかを考える。

今日のメニューは、体操↓ダッシュ（50m×10本）↓筋力運動（腕立て・腹筋等）↓ランニング（3?を18分以内）↓壁打ちorミニゲーム↓試合↓片付け、、

私は、ダッシュの後はみんなが疲れているので、水汲みをしに行った。

片付けが終わったのは5時半。

「お疲れ様でした」　　っと1年の子たちが2年生に向かって言う。
それを聞いてから、私は浩紀先輩を含む先輩達にタオルを渡した。
すると「サンキュ！」　　っと和也先輩。

それに続くように「ありがとう」「やーどーも」　　っと声がして、最後に浩紀先輩の「ありがとね」　　っと一言。

私は少しうれしくなって「お疲れ様」　　っとにっこっと笑いかけた。

テニス部のマネージャーは、私以外に3年の紗由先輩ゆさしかいない。

そして、紗由先輩は受験の関係で来ることはあまりできない。

だから、テニス部をいつもサポートしているのは私だけ…。

1年だし、頼りにしてくれているかはわからないけれど、みんなそれなりに満足してくれていると思う。

私がこんなことを思っていると、浩紀先輩がいつものお誘いをしてきた。

っと言っても、単に帰り道が途中まで同じだから一緒に帰るだけで、別に大した意味などない。

けれど、それが私の1日の楽しみの一つであった。

学校を出て一つ目の角を曲がると「なあ！今日の練習メニューどうだった？」っと先輩が訪ねてきた。

「どうって何がですか？」

私は話の意図がわからなかったので聞いてみた。

「そのまんまだよ！」

「世間的には今日からだけど、俺達テニス部は明日からゴールデンウィークに入るじゃん？」

「だから、練習できなくなるし少しキツくしてみたわけ！」

『ああなるほど！』っと思いつながら、「そうですね…」「疲れてないって言うたら嘘になると思いますけど、みんな充実してるみたいでしたし、少しキツいぐらいなら逆にやる気が出ていいと思いますよ」っと私は答えた。

それを聞いた先輩は「そう？そういつてもらえると嬉しいんだけど…」っと言い、「この後、時間ある？」っと聞いてきた。

私は『まさか！？これはデートのお誘いでは！？』　　つというはやる気持ちを抑え、「時間ならありますよ？」　　と言った。

「ならさ、近くにあるケーキ屋に行かない？」

「この間、中学の時の友達と一緒に入ってうまかったから…」

「お前、ケーキとかカロリーの高いもんダメか？」

「いやっ全然気にしないよ！！」　　つと私は間髪をいれずに答えた。

すると、先輩は「そうかぁーよかった…」　　つとぽつりとつぶやきながら店に向かい始めた。

店の中、2人の制服を着た男女はカップルのように見えたに違いない。

私は、そんなそわそわする気持ちを抑え先輩の話に耳を傾けた。

「あいつ、健けんじ二につつているじゃん？」

「あいつ玉拾いばっかしてるからかわいそうで…」　　つと後輩の心配をする先輩。

私は、自分の気持ちが昂る（たかぶる）のがだんだん馬鹿らしくなってきた。

だって先輩にはそんな気持ちはない。なのに…………。

『!?!』 そんなことを思っている矢先だった。

先輩はいつの間にか健二君の話を終え、私の話をしていた。

「お前ってさ、気が利くし、可愛いよな…」

「え？」 私はびっくりした。

健二君の話がいつの間にか終わっていることもそうだが、なにより先輩が私をそんな風に思っていたことがびっくりだった。

「俺さ、、お前のことが・・・綾乃のことが好きだ」

「ずっと迷ってたんだ・・・好きって言おうかどうか・・・」

「ゴールデンウィークにほかの奴等やつらは彼女とデートとかで毎日を楽しんでいるし、なんか俺だけ置いてかれてるような気がする…」

「だから、、その、、それに押される感じで、告白しようと思ったんだ…」

「けど、誰でもよかったわけじゃない…」「お前が、、」

「俺は綾乃が良かったんだ…」

「こんな俺だけダメかな?」「付き合ってくれないか?」

そんな…!!自分の耳が信じられなかった。

浩紀先輩に告白されるなんて…。

ありえない…ありえないよ…。

私はそう思い、2、3度目をパチパチした。

けれど、どうやら目の前で起きていることは現実であり、私の妄想などではなかった。

だから「もっ、もちろん!!」私は叫ぶように答えた。

すると「ほんとにか?ほんとにか?」っと聞く先輩…。

私は頬をほんのり赤く染め答えた。

「いいですよ…私も先輩のことが好きですし…」っと

。

私は告白のOKして、明日デートする約束をして、浩紀先輩にバイをした。

しかし、浩紀先輩がデートに来ることはなかった。

ケーキ屋を出たのが7時前…。

それから「家まで送るよ」と言い、私を家まで送ってくれた。

その後である。

浩紀先輩は自分の家に帰る途中、車に轢かれて亡くなった。

車の運転手はお酒を飲みまくり、意識が朦朧もうちゅうとする中運転し、赤信号で信号を突っ切った。

そこを渡っていたのが浩紀先輩である。

私は亡くなってしまった浩紀先輩の葬儀に参列し、お別れを告げた。

想いを一緒にすることができたのはたったの数時間だったけれど、確かに浩紀先輩は私と一緒にの時を過ごしていた。

悲しくないはずはない。

けれど、いつまでもクヨクヨしてはいられない。

だから私は泣きたいだけ泣いて、そつと涙を拭いた。

そして齒をグツと噛みしめて、私は笑ってみせた。

泣いても仕方がない。なら先輩のためにも、、浩紀のためにも

これからを笑って生きよう。

それが私が浩紀にできる唯一のことだと思ったから…。

（後書き）

綾乃の想いは伝わりましたか？

少し悲しいお話だったと思います。

才能がないので涙は出なかったと思いますが、綾乃の想いを伝えることができたならうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2362t/>

私の恋と私のサヨナラ・・・

2011年11月16日12時31分発行